

ウスペンスキー『奇跡を求めて』11章 抜粋

[グルジェフは言った。]

真っ先に理解すべきこととして、人がそのなかで生きる場所の眠りは、自然な眠りではなく、催眠性の眠りである。人は催眠下にあり、この催眠状態はつねに維持および強化されている。なんらかの力の働きのためには、人間を催眠状態に留め、人間が真実を見て自分の現状を理解するのを妨げたほうが都合がよいのだと思える。

ある東洋の小話によると、むかしとても裕福な魔術師がいて、たくさんの羊を飼っていた。この魔術師は、とてもケチだった。羊飼いを雇いたくない。羊たちのうろつく草原に柵を設けるつもりもない。羊たちはよく森に迷い込んで、断崖から落ちることもあった。それによく逃げ出した。魔術師が自分たちの肉と皮を欲しがっているのを羊たちは知っていて、これは勘弁してもらいたかったからだ。

ついに魔術師はいいことを思いついた。彼は羊を催眠にかけ、羊たちに暗示した。第一に、おまへたちは不死身であり、皮をはがれてもだいじょうぶ。それは健康によいことで、気持ちいいぐらいだ。第二に、魔術師は良き主人であり、羊たちが大好きだ。羊たちのためならなんでもする。第三に、なにが起こるにせよ、それは今日のことでないので、心配はいらない。さらに魔術師は、おまへたちは羊ではないのだと暗示をかけた。何匹かには、おまへたちはライオンなのだと言った。何匹かには、おまへたちはタカなのだと言った。何匹かには、おまへたちは人間だと言った。何匹かには、おまへたちは魔術師だと言った。

このすべてを終えた後、魔術師はもう、羊のことで気をもんだり、心配したりすることがなくなった。羊たちはもう逃げようとせず、魔術師が彼らの肉と皮を必要とする日が来るのをおとなしく待つようになった。

この小話は、人間の置かれた状況をよくあらわしている。